

エロイーズの愛の純粹性

著者	石川 郁二
出版者	法政大学多摩論集編集委員会
雑誌名	法政大学多摩論集
巻	20
ページ	273-292
発行年	2004-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/1738

エロイーザの愛の純粋性

石 川 郁 二

1. はじめに

イギリスの18世紀に活躍したアレグザンダー・ポープの作品である『エロイーザからアベラードへ』（1717年）には、アベラードに寄せるエロイーザの一途な愛が歌われている。

この作品は、2人の恋愛が幸せな結婚という形態では終わっていない。アベラードとエロイーザは2人とも結婚できない境遇に身を置いており、18世紀の読者にはそのことは周知の事実なのである。

エロイーザはアベラードを愛しているが、彼と結婚して妻になることを夢見ているわけではない。エロイーザの愛は、愛するアベラードと一緒にいたい、常に心を通わせていたいという愛であり、世俗的な願望や肉体的な欲望を削ぎ落とし、純粋な愛に昇華していく愛なのである。

エロイーザは、名声や富が付いてまわる結婚という形態での妻になるよりも、むしろアベラードの愛人になりたいとさえ希望している。その愛は、結婚だけが目的ではない愛だからこそ、それだけ愛に対して純粋であるとも言えるのである。

この小論は、アベラードに対するエロイーザの愛の純粋性を、ポープはどのように描写し、印象づけようとしているのかを論じたものである。

2. 作品について

ポープの『エロイーザからアベラードへ』という書簡詩以前に、フランスで広く読まれていた『アベラールとエロイズ』という愛の書簡集がもともと存在する。この愛する2人は12世紀に実在していたのである。

アベラールは、フランスの有名な神学者であり哲学者でもあったピエール・アベラールである。彼はフランス北西部にあるブルターニュ半島のル・パレの騎士の城で1079年に生まれた。エロイーズは1101年生まれで、人も羨むほどの才媛であった。エロイーズはノートルダム大聖堂付高位聖職者であったフルベールの姪であり、アベラールとは師弟関係にあった。¹⁾

フルベールは姪のエロイーズのために、新進気鋭の学者として当時有名になってきていたアベラールに、住み込みの家庭教師として来てくれるように頼んだのである。アベラールは40歳に手が届く頃で、当時18歳だった教え子のエロイーズと恋に落ちる。2人は相思相愛の仲になり子供ができるが、このことが叔父フルベールの知るところとなり、不幸な事件が起こる。その結果、2人は世を捨ててそれぞれ別の修道院に入ることになるのである。

『アベラールとエロイーズ』は、最初、ラテン語で書かれていた。この愛の書簡集は、その後、フランス語に翻訳された。

この往復書簡は第12書簡までである。第1書簡はアベラールから友人宛に書かれたものである。その第1書簡がエロイーズの手に入り、エロイーズがアベラールに手紙を書く。これが第2書簡で、第3書簡はアベラールからエロイーズ宛に書かれた書簡である。²⁾

第1書簡によると、アベラールとエロイーズは叔父の目を盗んで愛し合うようになる。結婚式を挙げる前にすでに子供ができていた。このことがエロイーズの叔父を激怒させることになるのである。

アベラールはエロイーズを叔父の家から連れ出し、故郷にいる妹のところ滞在させる。エロイーズはアベラールの妹の家で男の子を出産するのである。

2人はその後パリに戻り、身近のごく少数の人たちの前で結婚式を挙げる。結婚のことはアベラールのほうから言い出している。しかし、アベラールがエロイーズを妻にしたいと言った時、エロイーズは結婚することに反対している。反対の理由は2つある。1つは、叔父達のことを考えるとこの結婚が危険であること、2つ目は結婚をしたと世間に知れるとアベラールの不名誉になると思つてのことであった。この時点でもエロイーズは、愛するアベラールのことをまず第一に考えているのである。

結婚式を挙げた後、エロイーズの叔父はこの結婚のことを秘密にするという約

束を破り、公にし出すのだ。アベラールはエロイーズを叔父から守るために、女子修道院に預かってもらうことにする。しかしそのアベラルールの思いがそのまま彼女の叔父や親族には伝わらない。彼女の叔父や親族は「彼女を厄介払いするために」アベラールがエロイーズを修道女にしたと勘違いし、ひどく怒ってしまうのである。彼らは人を雇い、アベラルールを襲わせる。その暴漢は2人の「苦しみを引き起こした源である」アベラルールの身体の或る部分を切断してしまう、つまり、アベラールはエロイーズの叔父フルベールの復讐を受けて、暴漢に襲われ去勢させられてしまうのである。

この陰惨な事件の結果、エロイーズは正式に女子修道院に入ることになる。アベラルールの言葉に従い、修道女の道を歩むのである。エロイーズはアベラールとの愛を諦め、自分から求めて修道生活に入ったわけではないのだ。

18世紀の読者たちはこの愛の書簡集の内容はすでに知っていた。悲恋に終わる2人の運命を題材にしたポープの詩には、細かい説明は不要であった。

ポープが書いた『エロイーザからアベラードへ』の書簡詩は、2人の書簡集という形式ではなく、エロイーザがアベラードに宛てて書いた1通の書簡詩という形式になっている。作品のテーマは「神の恩寵」と「人間の本性」との葛藤であり、節操と愛の激情との葛藤としてポープはこの物語を詩に歌っているのである。³⁾

ポープはラテン語やフランス語訳ではなく、ジョン・ヒューズの英語訳に基づいてこの作品を書いたと言われている。⁴⁾ エロイーザの「愛に苦悩する心」と「敬神の心」を入り混ぜながら、詩として語彙や韻律等にも細心の注意を払い、評価の高い作品に結晶させているのである。

3. 「世俗的な願望」と「肉体的な欲望」との決別

ポープの『エロイーザからアベラードへ』の作品は、エロイーザが修道生活に入ってから、かなり経った後に、アベラードが友人に宛てて書いた手紙が、ふとしたことでエロイーザの手元に届く、という設定で始まっている。

エロイーザがアベラードに会った時、エロイーザは叔父の家で大切に育てられているまだおぼこ娘であった。アベラードは住み込みの家庭教師である。叔父の

石川

フルベールはアベラードに姪の教育を一切任せ、信じ切っていた。エロイーザも、叔父と同じように、何の疑いもなくアベラードの言うことをすべて信じていたに違いない。そんな２人に恋が芽生えたのである。

From lips like those what precept fail'd to move?
Too soon they taught me 'twas no sin to love.

(67-68) ⁵⁾

その唇から語られない教えがあったのか？
あまりにもすぐに、愛することは罪ではないと私に教えてくれました。

神学や哲学のことを理路整然と説明するアベラードの言葉に、若い娘は心を奪われていく。エロイーザは学問が出来る乙女であった。水が乾いた砂にしみ込むように、アベラードの言葉はエロイーザの心に深く刻み込まれたことであろう。

Oh happy state! when souls each other draw,
When love is liberty, and nature, law:
All then is full, possessing, and possest,
No craving Void left aking in the breast:
Ev'n thought meets thought ere from the lips it part,
And each warm wish springs mutual from the heart.
This sure is bliss (if bliss on earth there be)
And once the lot of *Abelard* and me.

(91-98)

ああ、幸せな状態よ！ 魂がお互いに引かれ合う時は、
愛が自由であり、自然が法則である時は、
その時すべては満たされ、所有し所有されている、
胸にうずく、熱望する空虚感はない、
口から発せられる前に、思想でさえ思想に出会う、

エロイーザの愛の純粹性

熱望はお互いの心の中から生じるのです。

これは確かに天上の喜び（天上の喜びがこの世に存在するならば）、
かつてそれがアベラードと私の運命であった。

2人の仲は幸せに満ちており、至福の時を過ごしている。

その後に訪れた悲劇は、2人を引き裂き、別々の道を歩ませることになる。しかし、エロイーザの心はいつもアベラードに従順である。エロイーザが女子修道院で誓いをした時、まだ情熱に燃えている青春時代であった。その世俗の生活に別れを告げなければならないエロイーザにとっては、とても苦しく悲しい時であった。それは、アベラードとの愛のためであり、愛する人のためであると思い、彼の言葉に黙って従うのである。

女子修道院で修道女の誓いをする厳粛な時でさえ、エロイーザの心にはアベラードが存在している。

As with cold lips I kiss'd the sacred veil,
The shrines all trembled, and the lamps grew pale:
Heav'n scarce believ'd the conquest it survey'd,
And Saints with wonder heard the vows I made.
Yet then, to those dread altars as I drew,
Not on the Cross my eyes were fix'd, but you;
Not grace, or zeal, love only was my call,
And if I lose thy love, I lose my all.

(111-18)

冷やかな唇で神聖なベールに口づけした時、
聖堂は震え、ランプは薄暗くなった、
神は眼前の征服をほとんど信じていなかった、
聖人たちは我が誓いを驚異の念で聞いていた。
その時でもまだ、恐れ多い祭壇に近付きながら、
十字架ではなくあなたの上に、我が目はじっと注がれていた、

恩寵でも熱意でもなく、愛だけが我が望み、
なんじの愛を失うのなら、私はすべてを失うのです。

この儀式は、エロイーザが修道女になりたいと自ら望んだ誓いの儀式ではなく、愛する人の言い付けを守ってエロイーザが臨んだ誓いの儀式である。それゆえ、その厳粛な時でさえエロイーザの心の奥にアベラードがいるのは当然のことである。

このエロイーザの心を神や聖人たちが知らないはずはない。エロイーザの心の中に世俗の愛があるために、神はエロイーザの誓いをほとんど信じておらず、聖人たちは驚異の念でそれを聞いている。

女子修道院がエロイーザにどんな影響を与えたのであろうか。

「世俗的な願望」との決別

アベラードから友人に宛てた手紙がエロイーザの手元に届き、その手紙を読む時のスタンザの中に次ぎの描写がある。

There stern religion quench'd th' unwilling flame,
There dy'd the best of passions, Love and Fame.

(39—40)

そこでは厳格な修道生活が反抗の炎を滅し、
最も熱望するもの、愛と名声がそこで消えたのです。

エロイーザは、女子修道院生活が反抗心を消したと思っている。そして、愛と名声が消滅したと思っているのだ。だが、果たしてこの二行連句に歌ってあるように、エロイーザはすべてを捨て去ってしまうのであろうか。

エロイーザが修道生活で捨て去ってしまったものは、どうもエロイーザの反抗心と名声であったようだ。

エロイーザは名声や富という世俗的なものに関心を示していない。そのようなものは愛そのものではなく、どちらかという結婚と密接な関係があるものと考えている。

Let wealth, let honour, wait the wedded dame,
August her deed, and sacred be her fame;
Before true passion all those views remove,
Fame, wealth, and honour! what are you to Love?

(77—80)

富と名誉を結婚した淑女にはべらせ、
彼女の行為を威厳あるものに、彼女の名声を聖なるものにせよ、
真の激情の前では、それらすべては消えてしまう、
名声、富、そして名誉！ あなたたちは愛神にとって何だというのか？

「名声、富、そして名誉」という社会的、経済的な要素にエロイーザは何の価値をも置いていない。結婚して妻になるということは、そのような世俗的なものが付随するということである。夫婦として社会的に認められ、社会生活を営むようになると、愛だけでは解決のいかない問題が出てくるのは確かである。ここにもエロイーザの「妻より愛人」を望む理由の一つがあるようだ。

結婚というものは社会的に認められ、そして法律的にも許され、保護される制度である。そして、家庭とは社会組織を存続させるための集団としての最小単位と見なされている。だから夫婦には、組織の中の一員として、さまざまな役割が負わされることになるのだ。そこには2人の純粹な愛というものだけでは生活できないという、悲しい現実が横たわっているのである。

エロイーザはそのような制度的、打算的なものを2人の愛に持ち込むことを嫌悪している。

How oft', when press'd to marriage, have I said,
Curse on all laws but those which love has made!

(73—74)

結婚を懇望された時、何度私は言ったことか、

愛が作ったもの以外のすべての掟に呪いを！と。

嫌悪よりもっと強い感情を示し、侮蔑しているのである。

2人の関係は相思相愛の仲であり、愛があれば他のものは何も必要ではなかった。お互いの魂は引かれ合い、お互いが考えていることは言葉に表さなくとも理解し合える状態であった。空虚感などは心のどこにもなく、心は常に満たされている。自由に愛し合えることは「天上の喜び」とまでエロイーザは言っているのである。

エロイーザは妻という身分になるよりも、愛人と呼ばれたい、と望んでいる。

それは、2人の愛の行方がすでに決まっているということにもよる。2人の愛の一番大きな障害は、エロイーザが修道女の誓いをしているということである。つまり、キリストの花嫁になっているエロイーザにとって、人の妻になることはできないのだ。神に身を捧げたエロイーザにとって、アベラードとの結婚は叶うことのない望みである。そのことは自覚しているのだが、エロイーザはアベラードとの愛だけに生きることを望んでいるのである。

Should at my feet the world's great master fall,
Himself, his throne, his world, I'd scorn 'em all:
Not *Cæsar's* empress wou'd I deign to prove;
No, make me mistress to the man I love;
If there be yet another name more free,
More fond than mistress, make me that to thee!

(85—90)

たとえ世界の偉大な支配者が我が足下にひれ伏そうとも、
彼自身、彼の王座、彼の世界すべてを私は蔑む、
シーザーの後に、誇りを捨ててまでなろうとは思わない、
そうだと、我が愛する人の愛人にせよ、
それよりもっと自由な名があれば、
愛人よりもっと情け深い名があれば、私をなんじのそれにせよ！

ここで「愛人」という言葉の英語には“mistress”という単語が使われているが、この愛人という名前にエロイーザは固執しているわけではない。自分の愛情を貫き通すことができる立場、自分の願望を一番うまく表現する呼び名が他にあるのならば、そのほうがよいと望んでいる。表面的なものよりも自分の心に忠実な、実体に合う言葉を熱望しているのである。

エロイーザのいう「愛人」とは、愛情を育み、男性に心から従う女性という意味合いがあるようだ。いくら愛する人を慕っても、女子修道院を出て一緒に生活することはできないということは分かっている。死ぬまで修道院にいななければならない、という境遇をエロイーザは受け入れているのである。その上での愛である。「永遠にこの地に留まらねばならないのです／愛人がどんなに心から従順でありうるかという悲しい証明！」（171-12行）と歌っているエロイーザは、“mistress”というものに誇りを持っているようにも思えるのである。⁶⁾

女子修道院に一生留まるというエロイーザの決意は、愛するアベラードのためを考えてのことである。エロイーザが還俗して、アベラードと一緒に生活し、自分の愛を貫こうとすれば、それがアベラードの名声を失墜させることになるのは目に見えて明らかである。エロイーザがアベラードに近付けば近づくほど、アベラードにとってはまずいことになる。エロイーザの愛は利己的な愛ではない。自分の愛を貫くために、愛する人を巻き込んで破滅へと向かう愛ではない。愛するアベラードのためを考え、アベラードの不利になるようなことは一切しない愛なのである。

結局、愛以外の世俗的な欲望は、エロイーザの心から消えていく。

「肉体的な欲望」との決別

エロイーザの愛は、時には肉欲的な想像まで心の中に生じさせるものである。女子修道院にいるエロイーザにとって、世俗の男性に心を奪われるということは罪深いことである。エロイーザは美しい肉体を持っているアベラードを愛しているのであり、同じように肉体を持っているエロイーザがそこには存在しているのである。

Come! with thy looks, thy words, relieve my woe;

Those still at least are left thee to bestow.
 Still on that breast enamour'd let me lie,
 Still drink delicious poison from thy eye,
 Pant on thy lip, and to thy heart be prest;
 Give all thou canst — and let me dream the rest.

(119—24)

さあ！なんじのまなざし、なんじの言葉で、私の悲哀を和らげて下さい、
 それらはまだ、私に与えるためになんじに残されているのです。
 常にあの胸に魅了され、抱かれ、
 常になんじの目から甘美な毒薬を飲ませて下さい、
 なんじの唇の上であえがせ、胸にひしと抱きしめて下さい、
 なんじが与えられるものはすべて与え、その他は夢に見させて下さい。

このエロティックな欲望を感じさせる言葉は、エロイーザが修道女の誓いを神にする時、心の中でアベラードに訴えかける愛欲である。神に冷たい心で誓うエロイーザの表面的な言葉とは対照的に、心の中ではアベラードへの熱き愛慕の情がまだ脈々と流れている。

祭壇に近付き誓いをする時、神を欺くエロイーザに聖堂は震え、室内のランプも輝きを失うのだ。エロイーザの目は十字架の上ではなくアベラードの上にじっと注がれ、アベラードの愛を失うことは自分のすべてを失うことと同じであるとまで思い詰めるのである。

エロイーザの愛欲はより一層激しくなる。1日のお勤めを悲嘆の中に終えると、エロイーザの良心はもはや働かなくなり、本性が頭をもたげ出す。アベラードを求めるエロイーザの魂は自由になり、一目散にアベラードのもとへと急ぎ、楽しい愛の夢に耽るのである。

O curst, dear horrors of all-conscious night!
 How glowing guilt exalts the keen delight!
 Provoking Dæmons all restraint remove,

エロイーザの愛の純粹性

And stir within me ev'ry source of love.
I hear thee, view thee, gaze o'er all thy charms,
And round thy phantom glue my clasping arms.

(229—34)

ああ、すべて意識ある夜の呪わしくも愛しい恐怖！
真っ赤に燃える罪が強烈な歡喜をなんと刺激することでしょうか！
しゃくにさわる悪魔が抑制をすべて取り除き、
私の中のあらゆる愛の源を刺激するのです。
なんじの声を聞き、姿を見、魅力のすべてをじっと見つめ、
私はなんじの幻を抱擁せし腕を放そうとはしないのです。

悪魔がエロイーザの心の抑制を取り除くというようになってはいるが、実際にはエロイーザ自身がそのことを望んでいるということなのであろう。

「ヴィーナスの松明は死者のために燃えているのではない」（258行）と言うエロイーザには、もう恐れるものは何もないように感じられ、自分の愛だけがすべてであり、アベラードとの愛がエロイーザの生き甲斐となっているのだ。

エロイーザはどこにいてもアベラードのことを思うようになる。逃げて追いかけてくるアベラードの幻、林の中を散策していても目の前に現れる彼の姿、やがて、勤行中にもアベラードの幻は現れるようになる。朝のお祈りをしていてもアベラードのことを慕い、ため息をつき、賛美歌の中にアベラードの声を聞くのである。エロイーザの心の中では、彼女と神との間にアベラードが立ちふさがり、大きな位置を占めるようになっていく。

Take back that grace, those sorrows, and those tears,
Take back my fruitless penitence and pray'rs,
Snatch me, just mounting, from the blest abode,
Assist the Fiends and tear me from my God!

(285—88)

石川

あの恩寵、あの悲しみのもと、あの涙を取り消し、
我が無益な懺悔と祈りを取り消して下さい、
登ってきて、私を聖なる住居から奪い、
悪魔たちに手を貸して、神から私を無理やり引き離して下さい！

悪魔の力を利用してまでアベラードとの愛を成就したいと思う、切ないまでのエロイーザの心が伝わってくる。エロイーザの魂は、愛に燃える「炎の海の中で」(275行) 溺れてしまっているのである。

しかし、そんな肉体の欲望は次第に消えていくのである。

エロイーザがアベラードのことを思い、自分の愛の激情に身を任せている時、必ずそのすぐ後に、エロイーザの心に反省が起こり、神のことを考えるようになる。そして愛の炎に身を焦がし、エロティックな想像にまでエロイーザの感情が高まっていった後には、それ以上の大きな自省の念が生まれるのである。

Ah no! instruct me other joys to prize,
With other beauties charm my partial eyes,
Full in my view set all the bright abode,
And make my soul quit *Abelard* for God.

(125—28)

ああ、そうではない！ 他の喜びを尊ぶように私に命じ、
他の美点でえこひいきな目を歓喜させ、
私の視界一杯に輝く家を置いて下さい、
そして我が魂に、神のために、アベラードを諦めさせて下さい。

修道女の誓いをする時、エロイーザの心には、神よりもアベラードへの愛が満ちあふれている。しかし、アベラードの胸に抱かれたいと思った後、すぐにエロイーザはその不浄な想念を否定し、神に助けを求める。アベラードとの愛に喜びを見出していることをエロイーザは反省し、神を尊び、すべてを神に任せきる喜び、信仰の喜びを求めるエロイーザへと変わるのである。

エロイーザの愛の純粹性

アベラードを慕う気持と自省の念は交互に現れ、エロイーザの心の動揺を読者に伝えている。そして感情の高ぶりが強くなるにつれて、理性が頭をもたげ、反省の度合いも強くなっていく。エロイーザは愛の苦悩に耐えられず、「悪魔たちに手を貸して」でも、自分を神のもとから救ってくれるようにアベラードに頼んでいる。しかし、すぐにまた自省の念が起こり、自分の不遜な思いを打ち消すのである。

No, fly me, fly me! far as Pole from Pole;
Rise *Alps* between us! and whole oceans roll!
Ah come not, write not, think not once of me,
Nor share one pang of all I felt for thee.

(289—92)

いいや違う、私から逃げて、私から離れて！ 両極の間ほど遠くに、
アルプスが二人の間に聳え立つ！ あらゆる海洋がうねり回る！
ああ来ないで、書かないで、私のことを一度たりとも考えないで、
なんじのための我が煩惱を、一つでも共有することがないように。

エロイーザはアベラードのことを諦めようと努力している。アベラードとの愛の誓いをなかったものにし、アベラードとの思い出も捨て去ろうと決心するのである。

エロイーザは自分のことを忘れてくれるようにアベラードに頼んでおり、さらにどんなものでも自分に関係するものは憎んでくれるように、アベラードに訴えかけている。ここには可憐な乙女心が感じられ、自分のことを諦めるようにと言葉では言っているとしても、アベラードのことを諦めきれないエロイーザの哀れな気持が、波紋のようにますます大きく読者に伝わってくるのである。

眠りについたエロイーザは、本性だけではなく魂も自由になり、アベラードを見、声を聞き、愛の激情に溺れてアベラードを抱擁している夢を見る。その夢から覚めたエロイーザは、アベラードの幻が自分から逃げていくのを感じるのである。大声で呼んでもエロイーザの言葉に耳を貸さず、音もなく離れ去ってしまう。

「その幻は私から逃げる、あなたと同じように不人情なのです」(236行)とエロイーザは、幻のつれない素振りに不満を述べている。エロイーザのエロティックな求愛をアベラードが受け入れることはないのだ。

エロイーザの欲望は消滅していく。アベラードとエロイーザが愛の激情に溺れることはもうない、とエロイーザ自身自覚しているのである。

4. エロイーザの純粋な愛

アベラードの幻を見、声を聞き、愛に狂ったようなエロイーザに、天使たちは震え回るのであるが、エロイーザが自省と自責の念に襲われ、神に助けを求めて一人苦しんでいると、神の恩寵が現れ出すのだ。

While prostrate here in humble grief I lie,
Kind, virtuous drops just gath'ring in my eye,
While praying, trembling, in the dust I roll,
And dawning grace is opening on my soul. . . .

(277-80)

ここで打ちのめされ、謙虚な悲嘆で私は横たわり、
感謝の力強い涙が目にとまるのです、
お祈りをし、震えながら、私は屈辱を受け転がり回る、
すると、現れ始めた恩寵が我が魂に見えてくるのです....

しかし、エロイーザはこの恩寵をすぐに受け入れることはなく、またもやアベラードのことを思ってしまう。魅惑的なアベラードを挑発するように、神に逆らっても自分のもとに来てくれるようにエロイーザは訴える。寄せては返す波の如く、エロイーザの心は、神とアベラードの間を揺れ動いているが、しだいに神に近付いていくのが分かるのである。それは、エロイーザが理性的になり、神に救いを求める心の描写が、徐々に大きく、強くなっていくからだ。

エロイーザの愛の純粹性

エロイーザが打ちのめされ、一人で力なく横たわっていると、聖なる乙女の声が聞こえてくる。その声はエロイーザに差し延べられる救いの手である。

Once like thy self, I trembled, wept, and pray'd,
Love's victim then, tho' now a sainted maid:
But all is calm in this eternal sleep;
Here grief forgets to groan, and love to weep,
Ev'n superstition loses ev'ry fear:
For God, not man, absolves our frailties here.

(311-16)

私もかつてはなんじのように、震え、涙し、お祈りをしました、
当時は愛の犠牲者、今は聖なる乙女、
ここ永遠の眠りではすべては平穏で、
悲嘆はうめくことを、そして愛は涙することを忘れ、
迷信さえあらゆる恐怖を失うのです、
というのは、ここでは人間ではなく神が我らの心の弱さを許すからです。

この聖なる乙女は、かつて愛の激情に溺れていた女性である。彼女は過去の自分の姿を現在のエロイーザの中に見ているのだ。その聖なる乙女は自分のいる神聖な場所に来るように、エロイーザを誘っている。そこは、美しい花が咲いており、愛の罪人が苦悩することなく、いつも心を平静に保つことができる、そんな場所なのである。

そこでは「愛は涙することを忘れ」と言っている。ここで重要なことは、その聖なる乙女は「愛を忘れる」「愛が無くなってしまう」とは言っていないことである。「愛は涙することを忘れ」と言っているのである。つまり、愛における驚喜や苦痛、憧れや落胆などの情火により、泣くことがないということである。愛に溺れ自己を忘れることがなくなる、と言っているのであり、2人の愛が存在しなくなるという意味では決してないのである。

エロイーザはそこに行こうと決心する。そして自分がそこに行けるように準備

してくれるように頼むのである。

エロイーザにとってアベラードは唯一の男性であった。2人は愛し合い、現実には子供までもうけた仲であった。神に誓いをし修道女になったのも、アベラードの勧めにエロイーザは黙って従ったからである。エロイーザにとってアベラードは「我が父、兄、夫、友」（152行）の存在であった。また、エロイーザが暮らすようになるパラクリート修道院は、アベラードが荒野の中に建てた修道院であった。⁷⁾それは「敬神だけが建てることができ／神への賛美が響くだけのような質素な家」（139-40行）かもしれないが、エロイーザにとっては楽園なのである。

エロイーザの死の儀式はアベラードが執り行うようになっている。最期の儀式を執り行ってもらいたいと、エロイーザはアベラードに頼むのである。アベラードは聖なる法衣に身を包み、エロイーザの目の前に十字架を差し出す。一瞬、エロイーザはアベラードに向かって「最期の我が息を吸い、飛びゆく我が魂を捕まえて」（324行）と希望するのであるが、すぐにその愛の残り火を打ち消し、死を受け入れるのである。

See from my cheek the transient roses fly!

See the last sparkle languish in my eye!

Till ev'ry motion, pulse, and breath, be o'er;

And ev'n my *Abelard* be lov'd no more.

O death all-eloquent! you only prove

What dust we doat on, when 'tis man we love.

(331-36)

移ろいやすいばら色が頬から消えゆくのを見て下さい！

最後の輝きが私の目の中で衰えゆくのを見て下さい！

一つ一つのしぐさ、鼓動、呼吸が止まり、

私のアベラードでさえ、もはや愛されなくなるまで。

ああまったく雄弁な死よ！ お前はただ証明するのみ、

我らが愛するのが人間である時、どんな塵泥を溺愛しているのか、と。

エロイーザの愛の純粹性

エロイーザは自分の死をアベラードに見届けてもらいたいと願っている。それが死にゆくエロイーザが最後に希望する愛情の表現なのである。「その時には、私をじっと見つめても罪になることはないでしょう」（330行）と言うエロイーザの言葉には、愛がまだ心の中にあることがわかるのだが、それまでの激情に浸りきった愛とは全く違うものである。穏和な愛であり、恋人のことに大きな配慮を払う慈愛である。「感情」と「理性」が共存しているようにも感じられる愛である。

死がエロイーザの問題の解決になっているかどうかということについては、批評家によってさまざまな意見がある。⁸⁾ 死がエロイーザの心の葛藤を解決している、という意見もあれば、解決策にはなっていない、というものもある。しかし、死が解決策になっているかいないかという問題は、あまり大きな問題ではないように思える。死という一瞬の出来事よりも、死に至るまでのエロイーザの愛の過程のほうが、大きな意味を持っていると思われるのである。

「死、死だけが、永遠の鎖をゆるめることができます」（173行）と言うエロイーザは、アベラードのためにすべてを我慢し、自分の愛を心の奥深く包み込み、忍耐して死を待つ以外に生きる方法がない境遇であることを十分に自覚しているのである。

死によって、燃える炎に悶える愛はもはや存在しなくなる。激情的に高まりをみせる愛ではない。死によっても残っている愛とは、魂と魂が交流を図り、その2つの魂が1つになるような愛である。それは肉体の死によって消滅するような愛ではないのだ。

エピローグの中で、エロイーザは死後アベラードと同じ墓に入ることを望んでいる。

May one kind grave unite each hapless name,
And graft my love immortal on thy fame.

(343-44)

願わくば一つの情け深い墓が二人の幸薄い名前を一つにし、
なんじの名声に我が永遠の愛を付け加えんことを。

愛を最後まで抱き続けているエロイーザには、アベラードと同じ墓に入りたいという願望がある。これは愛を貫き通すというエロイーザの決意であり、愛以外のもの、経済的なことや社会的なことには目もくれず、愛一筋に生きたいというエロイーザの切なく悲しい望みなのである。これは死んだ後のことを、生きているエロイーザが望んでいるのである。⁹⁾

アベラードに最期を看取られて、死の儀式をしてもらう時には、エロイーザの心はとても穏やかになっており、死を見守っているアベラードの側には、神がいるのであろう。

エロイーザはけっしてアベラードとの愛を捨て去ってしまったわけではない。愛の激情はなくなってしまったが、より純化された愛に昇華し、精神的な愛として存在し続けるのである。まさにエロイーザは自分の愛を貫き通しているのである。

5. むすび

『エロイーザからアベラードへ』という作品におけるエロイーザの愛の純粹性は、愛以外のものを求めることのないひたむきな愛であることだ。その一途な愛は最後まで変わることなく、エロイーザの心の中に生き続けている。

愛人になりたいというエロイーザの心は、結婚に付随する富、名誉、名声などの経済的または社会的なものを、自分の愛とは無縁のものと考えているためである。愛人になりたいという思いは、アベラードとの愛だけを求めたい、ということの結果だったのである。

その愛は時には肉欲的になり、エロティックな空想でエロイーザを狂わすこともある。エロイーザが愛に溺れ自分の欲望を前面に出していても、それは長く続くことはない。すぐにエロイーザの心に反省が起り、自分の激情を抑えようと努力している。感情と理性が作品の中で交互に現れながら、エロイーザの愛は徐々に変化し、肉欲的な欲望が愛から消えていく。純化された愛へと昇華していく。そして、落ち着いた愛に変わっていくのである。

その愛は激しく燃える炎から永遠の愛の浄火へと変化し、そして、恩寵が現れ出す。徐々にではあるが、エロイーザの心の中で、神とアベラードとの対立関係

エロイーザの愛の純粋性

がなくなっていく。神への愛とアベラードへの愛が共存していくと言ってもよいであろう。

エロイーザの愛は純粋な愛である。アベラードに寄せる一途な愛である。アベラードを唯一の人と思い、どこまでもアベラードを恋い慕うエロイーザの純真な愛なのである。

その愛はもともとエロイーザの心に抱かれていた愛ではあるが、その愛が純化された愛へと変貌をみせるのに、女子修道院での生活が大きな影響力を持っていることは疑う余地はない。そこには神に近づくエロイーザがいるのである。神の花嫁になった境遇と厳格な修道生活が、エロイーザから俗世の欲を消し去り、肉体的欲も消滅させてくれるのである。それらとの決別があつて始めて、エロイーザの愛は純粋な愛へと昇華するのである。

エロイーザの愛の純粋性は、エロイーザ自身の純粋さが根底にあるのは当然のことだが、世俗的願望や肉体的欲望との決別から生まれたものなのである。

注

- 1) 『ブリタニカ国際大百科事典』ティビーエス・ブリタニカ、1975年、第1巻324ページ、「アベラール」の項を参照。
- 2) 畠中尚志訳『アベラールとエロイーズ』岩波書店、1985年。書簡ごとにアベラールとエロイーズが交互に書いているわけではない。
第一書簡 アベラールより一友人へ
第二、四、六、九書簡 エロイーズよりアベラールへ
第三、五、七、八、十、十一、十二書簡 アベラールよりエロイーズへ
- 3) Alexander Pope, *Eloisa to Abelard* in *The Poems of Alexander Pope*, ed. John Butt, London: Methuen & Co. Ltd., 1968, p. 252. 作品の冒頭に付加されている “THE ARGUMENT” の中に作品のテーマは “the struggles of grace and nature, virtue and passion” とある。
- 4) Geoffrey Tillotson, “Introduction” of *Eloisa to Abelard* in *The Poems of*

Alexander Pope, ed. Geoffrey Tillotson, London: Methuen & Co. Ltd., 1972, II, pp. 295-6.

- 5) *Eloisa to Abelard* の引用はすべて John Butt 編 (1968) による。
- 6) 『アベラールとエロイーズ』の第一書簡の中で、アベラールはエロイーズのことを次のように述べている。「妻と呼ばれるより愛人と呼ばれる方が彼女にとってどんなに望ましく、私にとってもどんなに立派であろうとも附け加えた。彼女は私を結婚という鎖で無理やり彼女にしばりつけるのではなく、ただただ愛情によって彼女のものにしておきたかったのである。」32ページ参照。
- 7) Geoffrey Tillotson, "APPENDIX I of ELÖISA AND ABELARD, ABAILARD AND HÉLOÏSE" in *The Poems of Alexander Pope*, ed. Geoffrey Tillotson, London: Methuen & Co. Ltd., 1972, II, pp. 411-13.
- 8) Donald B. Clark, *Alexander Pope*, New York: Twayne Publishers, Inc., 1967, p. 67. Clark は死がエロイーズの心の葛藤の唯一の解決策になっていると言っている。Rebecca Price Parkin, *The Poetic Workmanship of Alexander Pope*, New York: Octagon Books, 1974, p. 73. Parkin は死はこの世での彼女の苦悩を終わらせているだけで、心の葛藤の解決にはなっていないと述べている。
- 9) この望みは現実に叶えられ、二人は死後同じ墓に埋葬されたのである。『アベラールとエロイーズ』参照。